

ドイツにおける歴史地理学の特質

——シュリーターの地理学をめぐって——

水 津 一 朗

コイブラー Kändler, R. は、シュリーターの大著「早期歴史時代における中欧の集落空間」(1) (一九五二年)を書評して、歴史地理学の方法論にとつて偉大な貢献をなしたものとしてみない賛辞をおくっている(2)。この賛辞は、ドイツにおける歴史地理学のがれを理解する場合、ふかくかみしめてみるべきものをふくんでいる。なぜならば、シュリーターこそは、「時間の克服」をとらえた(3)ゆえをもって、歴史的、社会的要因を強調する地理学者の一部から非難をうけつづけた当の人だからである。

「時間の克服」をめざす地理学的ところみの中から、偉大な歴史地理学の一つが実をむすんだという、一見矛盾した論理のしくみをつかまえては、ドイツ歴史地理学の動向の一つはわからない。

しかもシュリーター自身は、「歴史地理学」の題目で論文をかいたことは一度もない。それは、八〇才をむかえたかれが、みずから筆を下した八〇数個にのぼる著作目録(4)にあきらかなところである。ただぼう大な集落地理学ないし集落研究と銘うつ論文と肩をならべて、「ドイツ景観の歴史について」 Zur Geschichte der deutchen Landschaft (1912) とか、「ドイツ古代の集落空間」 Die Siedlungsraume des deutschen Altertums (1930) とか、直接歴史

や時代を表題にうたった論文が散見するだけである。ところがかれの集落研究は、たんに集落の現状分析にとどまるのでなく、すくなくとも集落を中心とする文化景観の歴史的変遷をおうものであったし、歴史時代の景観と銘うつ研究も、たんに一定時代の景観断面の復元にとどまるのではなく、まず景観の継続的変化の追求をめざすものであった。

具体例の一つとして、冒頭にかかげた大著のあらすじをとりだしてみよう。かれはこの書物で、早期歴史時代の集落空間の復元に重点をかけているのはたしかである。早期歴史時代とは、ローマ時代から中世の大開拓時代までであるが、当時の居住地域とともに、カロリンガー時代末期の森林開拓やその後の開発、最近の森林分布等が景観変遷史的に説明され、みごとに色彩をつけた地図に投影されている。また北西部と南東部（ハンガリア低地）のハイデや過去現在の湿地、海岸低湿地、ホッホヴァイデ、高地における未利用の岩石や水原地帯なども織別される。古地図、史料、地名、先史遺物や既存研究の大きかりな整理と、自然条件たる気候や土壌などのたんなる分析をつみかさねて完成したこの研究は、かれの地理学という以上に、ドイツ景観地理学全体の総決算である。いたるところに独自の見解が光っているが、中でもグラートマン Gradmanns, R. の「ステップ荒原理論」Steppertheorie とニーチュ Nietsch の「カシ林理論」Eichenwaldtheorie の多産な対立についてふれた節章は白眉であり、みずからの中部ドイツについての的確な判断による解釈ものべられている。

このような研究が、「時間の克服」といかに両立するかについては後でのべるとしても、シュリーターの地理学立場は、ヘットナー Hettner, A. による歴史地理学の定義からとおくはなれるものであった。ヘットナーの地理学本質論やその地理学分類法が、二十世紀前半におけるドイツ地理学の主流であったという観点にたてば、たしかにシュ

リーターの研究は、歴史地理学の領域からはみだしてしまふ。ヘットナーは歴史地理学についてつぎのようにならべている。「歴史地理学は多様の意味で使用されている。古くは地理学の歴史であつた。以前には人文地理学全体を歴史地理学と名づけたことがある。……一般には、歴史地理学を過去の時代の地理的考察となしている。……地理学が一定時たとえば現代にたくに愛好をもつということは本質的な差別ではなくて、地理学は一定時の断面を現実を通じてとり上げるのであつて、時間的發展はその時代面の状態を知るだけにとどまるのである(5)。「このヘットナーの言葉は、一九世紀から二〇世紀初頭にわたるドイツ地理学界の多義的な歴史地理学的見解を整理したものであり、みづからは、過去の一断面の地理的事象の研究をもつて歴史地理学として定義しようとするものであつた。

もともと歴史地理学は多岐的な内容をふくんできた。しかもヘットナーのこの定義自体、多くの矛盾をはらむものである以上、ますます事態はこみいってくる。

II

シュリーターは、リヒトホーフエン Richthofen やヘットナーにみられる関係科学 Beziehungswissenschaftとしての地理学的見解を批判し、地理学との類似のもとに「文化景観の形態学」Morphologie der Kulturlandschaftをあげた(6)。

関係科学としての地理学がめざす自然と人間との関係だけでは、地理的現象を十分につかまえることができないし、かつ、自然と人間の関係は無限なる対象をふくむものであるから、一科学のよくしうるところでもない。そこでシュリーターは、「われわれに必要なのは研究対象の限定であり、そのかぎりにおける考察の全き自由と偏見のなきことである」として、地理学の研究対象を地表現象たる景観的事物の形態と構図に限つたのである。

かれによると、景観を分析するには二つの方法がある。一つは Genetsch の研究であり、もう一つは原因 Kausalität の研究である。前者は、現在の景観がいかなる歴史の経過をへて形成されたかの研究、つまり景観変遷史的研究であり、後者は、かかる歴史的变化を規定する原因の究明である。この場合、「かれは注目すべき二つの概念、古景観 *Altlandschaft* と自然景観 *Naturlandschaft* をもちだした。古景観とは、特定の過去における地表の地理的狀態であり、自然景観とは、現在の気候条件のもとで全文化をのぞいたとき、自然的要因だけで成立する景観である。古景観の時間的継起をしらべることによって、かれの景観学は歴史地理学となる。

一九〇三年以来、かれは中部ヨーロッパの古代と中世について、古景観の地図化をこころざし、当時における森林、沼沢地、古集落地域の分布を研究し、北東チューリンゲン、ラインパルツ、ラインラント、東プロシア、中部ドイツ、エルザス・ロートリンゲン、スデーテン地方などの部分図をつくり、一九四〇年には一まずその大業を完成した。これが冒頭の大著となつて、一九五二年、はじめてラマーゲンから出版されたのである。

ところがヘットナーは、地理学本質論にふれるたびに、くりえかしシュリーターの景観論的立場に非難をなげかけた。地理学研究を景観のものに限定することによって、地域をくみわたる重要な要因をみおとすことになる、というのである。しかしここには、シュリーターに対するすくなからぬ誤解があるように思える。シュリーターは、景観の成立する原因探究にあたっては、ある点ではヘットナー以上にひろい立場にたっている。北東チューリンゲンの労作(7)の中では、こういつている。「集落は、その自然が移住に最適であるという単純な理由だけで成立するものではなく、他の契機が合目的顧慮のもとに作用している。個々の場所の地表面の大きさや境界面積が、集落網の広さを規定している。本地域の東半部や西半部では、その広さがときにきわめてまちまちである。さらにまた、民族的規定を

習慣や、ゲルマンとスラヴの居住地間のちがいがあることによつても、それらの特別の状態が生じたのである。したがつて、近くによい場所があるのに、そこが古い集落域にあたるという理由だけで、あまりよくない場所に新村ができることありうる。」

このように、かれは社会的心理的要因をも認めることによつて、その地理学体系全体の片隅には、「人間集團の地理学」*Geographie der menschlichen Gemeinschaften* をも位置づけたのである(8)。実は「人間集團の地理学」を片隅に位置づけたことが、現代ドイツ地理学界における一つの問題点となるのであり、ここに主として三〇年代以前の地理学界で呼吸したシュリーターの立場の限界もあるのであるが、これについては後述する。

ヘットナーの批判にもかかわらず、かれの景観論の立場は多くの学者によつて支持された。ヘットナー門下のヴァイベル *Waibel, L.* をはじめ、クレープス *Krebs, N.*、ハッシンガー *Hassinger, H.*、クレドナー *Credner* などの業績をここでおもいおこすべきであろう。「歴史の地理的基礎」をあらわしたハッシンガーは、一九三〇年、「文化景観の形態学が、概念において人文地理学の主目的となるべきである」とのべている。ただかれが、歴史地理学を定義して、「過去の文化景観を復元し、文化的政治的關係からその成立時期を明らかにするもの(9)」とするとき、ヘットナーとシュリーターの二つの歴史地理学の綜合が企てられるとともに、それだけシュリーターの基本的立場からものはなれてしまうことになつたのである。

ここであらためて、シュリーターの「時間の克服」をとりあげなければならない。

三

「歴史の地理的基礎」というとき、あわせてイギリスにおけるイースト *East, G.* の「歴史の背後の地理」

Geography behind History がおもいだされる。しかしこれらの見方を、自然が歴史をいかに規定するかという姿勢だけで理解するのは正しくない。かれらの関心の一つが、かかる環境論にあったことは事実であるが、さらにすくなくともハッシンガーには、過去における文化景観の復元という意図があり、あきらかに「地理的歴史学」の域をこえていたのである。しかしシュリーターの歴史地理学は、過去の一断面の復元ではなく、文化景観を *genetisch* にとらえることであつた。景観変遷の中から継続的な系列、くりかえしのある現象を発見することであつた。

かれは地形学や生態学などの類似を念頭において、このことをのべているのである。マイネッケ *Meinecke, F.* にまでつながる歴史主義 *Historismus*⁽⁸⁾ の個性性原理 *Individualitäts prinzip* を固執するかぎり、シュリーターのこの立場はわからない。だが古景観は、たんなる人間歴史の現象ではなく、動植物や無機界などの生態学的要因のおりこまれたものでもあるかぎりにおいて、くりかえしの現象や、変化の一般法則を求めようとするのは全くのあやまりではない。

地理学的事象における体系や組織の追求は、現代ドイツ地理学界の大きな目標である。この体系化への意図を、シュリーターははやくも二〇世紀初頭、「時間の克服」においてあらわしたのである。

しかしこの表明は、かれにおいてはかならずしも論理的には鮮明なものでなかつた。かれの意図を論理的にはつきりするためには、景観を地域類型 *Raumtypus* として理解する立場が確立するのを待たねばならなかつた。だがこの新しい立場は、三〇年代レオ・ヴァイベルによってかすかに意識されたにとどまり、その確立は最近までもちこされてしまつた。一九三五年、景観概念を精密に規定つけたブルガー *Burger* の画期的論文 *Der Landschaftsbegriff. Ein Beitrag zur geographischen Erdraumauffassung* によつて、この点での進歩はみられない。景観を類型概念と

してとらえた第一人者はアメリカのサウア Sauer, C. O. (一九二五年)であった(11)。ドイツでは一九五二年、ラウテンザッハ Lautensach によつて、具体的な個々の場所の景觀を Land とし、類型としてとらえられた景觀型を Landschaft とすることによつて、景觀論的立場における体系化、一般法則化への骨組が、はじめてすすきりととのつた(12)。

シュリーターの景觀は Land であり、そのかぎりにおいて「時間の克服」は矛盾面をもつものであった。いまや類型としての景觀概念をうるることによつて、ドイツ歴史地理学は、理論的にも歴史主義を克服できることになった。ラウテンザッハの分類によると、類型としての景觀概念をめざすドイツ系地理学者としては、オプスト Obst, E. クレープス Krebs, N. ボベック Bobek, H. シュミットヒューゼン H. Schmithüsen, J. などがあげられるという。もちろんこれらの学者のすべてが歴史地理学者ではない。ラウテンザッハにしても、シュリーター地理学から多くの示唆をうけたが、その「形態推移」Formerwandel の法則は、みずから表明しているように、時間系列における変化の法則ではなく、空間系列に関するものであった。それはともかく、いまや歴史地理学が、法則定立的な一般地理学とふれあう理論的根拠がはつきりしたという事実が意味をもつのである。

四

しかもかかる理論の確立と相表裏して、法則の発見をめざす実証研究がすすんだ。理論と実践の一体化こそは、なによりもドイツ地理学の特質である。

クレンツリン Krenzlin, A. (3) は、耕地形態と経済形態の機能的対応の緊密なことを実証し、かつ集落形態はある種の形態的持続性をもつゆえに、耕地ほど経済形態にするべく対応しないと、これが完全に対応したさい、この

「最終形態」Endformは、「景観と人間社会の完全な調和」であり、生態学の極相 Klimax に対比できるとしたときは、形態変化の地理学的体系をもとめた実証研究の成果としてよいであろう。一圃農法に対応する北西ドイツの長紐耕地をつけた旧ドルツベル (Drubel、小村の一種)、中南ドイツにおける目立った交錯圃のある大集村たる旧ゲヴァン村落などは、最終形態の典型であったのに対して、東ドイツの旧氷河地方の大河谷や砂丘では、かかる最終形態はかつて生じたことがない。底堆石地方で中世スラヴ集落があるかなしかで、中世ドイツ東方植民とともに大規模な移住がおこなわれたところには、植民型のゲヴァン耕地集落、すなわち大広場村落や街村が、計画的な大ゲヴァン地割をつけて成立した。しかしこの景観は、一四―五世紀および三〇年戦争をへてくずれてしまい、新しい景観があらわれた。ここでは、景観の遷移現象があいついでおこった。

このようなクレンツリンの考え方は、たんなる机上の理論としてではなく、みずからフィールド調査とともに、一九世紀のマイツェン Meitzen, A. 以来の歴史地理学的実証の諸成果をふまえた上で展開されていることはいうまでもない。

いまやドイツでは、集落の歴史地理学的研究においては、長紐耕地をつけたエッシュェ村落 Eschdorf を母胎に、レスその他のこえた乾燥土壌地域では七、八世紀からゲヴァン村落が成立し、湿潤な砂質や粘土質地域ではカムプ耕地をつけた孤立荘宅が、またその中の微高地ではドルツベルが分布するといった景観の進化系列を適用しうる地域範囲もほぼ確実におさえられてきた。また、これらの中世的景観がいかに解体したかも、歴史地理学の有力な研究課題である。かかる景観の進化系列の設定にあたっては、ニーマイア Niemeier, G. (21) や ムィラ・ヴン Müller-Wille, W. (15) などの実証研究が大きい貢献をしたことをみのがすことができない。しかも歴史学との交流によって、これら

の進化系列が、社会経済の進化系列とほぼ機能的に対応することが証明されたのも、銘記すべきことである。

また集落形態の変遷については、ヘーヴェルマン Hövermann, J. によって方法論的な整理もおこなわれた(16)。

かれは集落研究を、形態的 *genetisch* と、構造的 *genetisch* 歴史的 *genetisch* に三大別し、各方法による集落変化の時間的尺度がちがうこと、研究にあたっては、原因関連と発展法則の理解につとむべきことを指摘している。なお最近かれは、アフリカ、北エチオピアの現景観に、ゲヴァン村落と小村交錯面両景観のあることを発見し、それらと中世ヨーロッパの古景観の比較研究によって、景観の成立と変遷について、より一層普遍的な法則樹立にもとりかかっている(17)。

かかる比較地理学的方法こそは、ドイツ歴史地理学の創始者ともいうべきカールリッターによって着意されたものであり、三二年にはプレヴェ Plewe, E. (8) により、三六年にはマウル Maul, O. (9) により、さらに五一年にはクレープスに(20)よって、新しい地誌的知識のもとに組織化がくわだてられた。実はこの比較方法がなくては、かの景観類型も正確にはつかむことができない。多くの未開拓地のあるこの分野にうちおろされたヘーヴェルマンの歎の意味するところは大きい。

歴史地理学における国際間の提携も、この辺から具体化するのではあるまいか。

五

地理学的法則をつくるには、地理学的対象の変遷系列をあきらかにすべきとすれば、結局、地理学の全部門それぞれが歴史地理学的でなければならぬことになる。トゥロール Troll, C. が、現代ドイツ地理学の特色として、機能主義的立場とともに歴史主義的立場をあげたさい、その歴史主義とは、かかる意味の歴史であった(21)。

したがって、地理学全体系の中にくみこまれた独自の分野としての歴史地理学について云々することは、ドイツ学界でも不可能に近い。

ドイツ地理学に系譜的につながるスイスのカロール Carol, H. の概念をかりて整理すれば、集落地理学、経済地理学などの各分科は、地理学の考察方向による分類であろうし、歴史地理学は、形式論的考察や機能論的考察とならぶ、地理学の考察様式による分類ということになるであろう。歴史地理学とは人文地理学であるという古い定言が、いまなお生きている。

しかも二〇年代までのドイツ歴史地理学の動向を展望したフォーゲル Vogel, W. (26) は、歴史地理学の前景には村落の歴史地理があるとのべたが、三〇年代以後には、政治、経済の歴史地理学的研究も盛んになった。これらの個々の動向についてのべる余裕はないが、注意すべきことは、これらの研究の母胎には、いまなおシュリーター地理学の影響がかんじられることである。レオ・ヴァイベルをへてオトレンバ Otrenba, E. へとつづく経済地理学においてこの傾向がもつとも強い。わが国の経済の歴史地理学の分野において、ついに開花することのなかつた特徴であるだけに、つよく吾人の胸をうつ。

六

三〇年代以降、ドイツの歴史地理学といはず、地理学全体のいちじるしい傾向として、景観をつくる社会的、政治的因子に焦点をすえる立場のたことがあげられる。この場合、これらの因子の強調が、シュリーター地理学の克服をめざしておこなわれる方向と、逆にシュリーター地理学へのつながりのゆえにとなえられる方向とがある。一面的に研究対象としてのシュリーターの景観概念のせまさに注目するとき、シュリーター地理学からの離脱が生れるし、

景觀成立の原因探究についてのシュリーターのひろく自由な立場に留意するとき、シュリーター地理学の包摂が生れる。このように、シュリーター地理学への評価は、ドイツ自体においてもかなりこみいつているとはいえ、社会的因子への傾倒は、歴史地理学的研究においてもきわめていちじるしい。

先にあげた景觀の進化系列と社会経済の進化系列の機能的対応系の樹立にしても、かかる潮流の中からあらわれたものである。方法論自体としてはともかく、シュリーターのフィールド研究は、*genetisch* な方向にかたよりすぎ、その自然的、社会的原因の実証の点では、やや弱体であったことは否定できない。

ただ自然的要因の究明においては、二〇世紀初頭、グラートマンが南ドイツの研究で、生態学的にみて画期的な方法をさししめたのが、今日まで大きい影響をあたえたのである⁽²³⁾。それにひきくらべて、社会学的原理を利用した社会的要因の究明は今後の課題であると、*Hahn, H.* ものべている⁽²⁴⁾。

なお三〇年前後から、都市研究が活潑化し、都市のもつ通商交通の結節点としての機能への着眼⁽²⁵⁾から、シュリーターの視角だけでは、正しく実体にアプローチできなくなった事情もある。クリスターラー *Chrastaller, W.* は、三八年、いちはやく景觀論からの脱出の必要をといいた⁽²⁶⁾。機能主義も、このような流れに棹さしたものである。経済や政治、社会の歴史地理学的研究が、かかる方向の実践を助けた。

ジーガーラントで、古代以来いとなまれたたたら工業と、その燃料たる木炭製造も含む一種の焼畑農業の技術的発達、および木炭から石炭への燃料の交替などによる文化景觀の変遷を追求したフィッケラ *Fickeler, P.* は、「経済地理学と経済史の美事な調和」を指摘している⁽²⁷⁾。

シュェッラ *Scheller* は、都市の結節機能に関心をもつとともに、一方、飛躍への意欲にあふれた労作「メルクベル

ク境界領域の歴史的文化地理学研究⁽²⁸⁾」でこういつている。「自然地理学の場合にきわめて有効で、かつ景観生態学 Landschaftsökologie において深い洞察をよそえた Kausalgenetisch な方法は、文化地理学的探究にあたっては、その特殊条件にうまくあてはまるようにしなければならない。そのさい、自然的制約性についてはやまった結論をたてるべきでないとは、しばしばのべられている。それにもかかわらず、集落地理学においてさえ、なお自発的な歴史的、社会的契機に、それにふさわしい席をあたえない点がある。地理学的科学の限界をふみはずしはしないかという配慮のあまり、地理的現象の歴史的機能的理解に必要なすべての解釈をとりあげ、その作用の効用を批判的に評価する視野をせばめることがあつてはならない。」ここでかれは、一方的に形態学派として不当に非難されがちなシュリーターが、すでに一九〇三年、景観形成要因としての心理や社会を認めた点を買うとともに、シュリーターが、これらの要因自体の科学的把握を、地理学的研究の予備作業に局限したことを批判している。「かかる研究の制約は、問題設定にあたって、事実と時間の制約を要求することになる。本研究において意図するところは、歴史的制約の制約性とともに、宗派の境界が集落の発達にいかにか影響したかということである。したがって、かかる要因が前景に立つべきであり、歴史的、地理的効用があるかぎり、それらを究明すべきである。」

シュツラはこのような見地から、ベルクとマルクの境界領域において、各時代の行政的、政治的境界や宗派、言語などの領域を復元するとともに、それら相互の関係を分析し、さらにこれらの歴史的領域が、いかに現在の地域構造を規定するかをしらべている。

おなじような見解を、フッテンロツヒナー Huttenlocher, F. その他にもうかがうことができる。かれは、現代ドイツの文化景観に作用する各旧封建領域の意義を強調する⁽²⁹⁾。

シュリーターの地理学を出発点とするといなとにかかわらず、それを超克しようとする傾向は、第二次大戦後、地理学の再吟味を介して新しい局面をむかえた「地域論」の流れとも複雑に交錯している⁽³⁰⁾。クリスタラーによって先駆的にさしめされた機能主義的地域論や、シュミットヘンナー Schmitthenner, H. その他によって批判された「地域個体説」も、より具体的な歴史地理学の実証の場をととのえてきた。地域中心としての教会所在地やゴージャル所在地、都城などの歴史的系譜と立地の変化を追求したクレッパー Klippner の研究⁽³¹⁾には、たんなるクリスタラー批判以上のものをふくんでいる。クレマー Crämer, U. は豊富な史料をもとに、古代のガウに由来するシュワーベンのアルゴイの境域が、時代的にいかに変化したかを調査し、地域概念の生成と本質に対して一つのサンプルを示した⁽³²⁾。「変化が歴史において唯一の不変なものであることを、地域としてのアルゴイが示している。……アルゴイが、小さいガウから、数百年の中に根本的により大きい地域に成長したとするのは、正しくない。アルゴイという言葉は、歴史のあらゆる時期に、ちがった内容をもっていたというのが正しい。その場合、はっきりした核心がありはするが、その限界は連続的であり、いまでも流動的である。農民戦争時代のアルゴイは、同時代人の観念界においては、一九世紀のアルピニズムのアルゴイや、九世紀の最初の開拓期における原アルゴイのそれとは、あきらかに別のものであった。……とざされた歴史的個体としてのアルゴイの領域は存在しなかった。……それにもかかわらず、アルゴイは存在したし、また存在している。」

七

ドイツ地理学から、観念論的雰囲気だけをくみとるとすれば、それは大いなるあやまりである。上にのべた諸成果が、てがたい研究手段を用いて精力的につみかさねられたものであることをのみのがしてはならない。

ここでは、マイツェン以来の古地図学的方法や、地名学的、文献学的、生態学的方法が、ぬかりなく活用されている。ケチュケ Kötzschke, R. がザクセン研究⁽³³⁾にあたって、マイツェンやランプレヒト Lamprecht, 以来の地籍図分析の学史を展望しているのが目をひくし、北西ドイツの集落や耕地の研究で、ニーマイアが駆使した地名学的方法にも教えられるところが多い。

トゥロールなどに代表される生態学も、たんなる考え方の問題ではない。生態学の基盤には、自然地理学や植物社会学の研究手段がある。ヘーヴェルマンの北西ドイツ低湿地集落、耕地、植物群落などの古景観の復元や時代推定に對して、ボーリングや発掘による成果を再吟味して反論したピーケン Peken, H. の論文⁽³⁴⁾をよむと、かつてのグラートマンとニーチュの先史南ドイツにおける論争をいまにきく感がある。ピーケンの実証への姿勢はきびしい。「形態類型の発展系列をみる場合には、つねに個々について証明すべきである。現在かこいこまれてカンフ耕地をなしたものが、最古代起源のものもあるし、またゲヴァンの綜画で成立したこともありうる。……」

シュリーターが地理学全体系の片隅にすえた「人間集団の地理学」を公道にとりだすにしても、ドイツ歴史地理学は、シュリーターにつながる景観変遷史がつくりだした重荷だけは、なお背おいつづけるであろう。それは、どこにだしても遜色のない、重荷だからである。

- 註 (1) Schlüter, O.: Die Siedlungsräume Mitteleuropas in frühgeschichtlicher Zeit. Ramagen 1952. (2) Käbler, R.: Peterm. Mitt. 96, 1952. (3) Schlüter, O.: Die Ziele der Geographie des Menschen. München. Berlin 1906. (4) Peterm. Mitt. 96, 1952. (5) Hettner, A.: Die Geographie, ihre Geschichte, ihre Wesen und ihre Methoden. Breslau 1927. (6) Schlüter, O.: Die Ziele.; Die Erdkunde in ihrem Verhältnis zu den Natur- und

- Geisteswissenschaften. Geogr. Anzeiger 21, 1920.; Die analytische Geographie der Kulturlandschaft Zeitschrift. d. Ges. f. Erdk. zu Berlin, Sonderband zur Hundertjahrfeier der Ges., 1928. ⑤ Schlüter, O.: Die Siedelungen im nordöstlichen Thüringen. Berlin 1903. ⑥ Schlüter, O.: Die Erdkunde in ihrem Verhältnis zu den Natur- und Geisteswissenschaften. Geogr. Anzeiger 21, 1920. ⑦ Hassinger, H.: Geographische Grundlagen der Geschichte. Freiburg 1930. ⑧ トーベント (中田和十郎) 歴史地理学の発展。東京。⑨ Lautensach, H.: Otto Schülers Bedeutung für die Methodische Entwicklung der Geographie. Peterm. Mitt. 96, 1952.
- ⑩ Lautensach, H.: Der Geographische Formenwandel. Studien zur Landschaftssystematik. Colloquium Geogr. 3, 1952, Bonn. ⑪ Krenzlin, A.: Dorf, Feld und Wirtschaft im Gebiet der grossen Täler und Platten östlich der Elbe. 1952 Remagen. ⑫ Niemeier, G.: Gewannfluren. Ihre Gliederung und die Eschkerntheorie. Peterm. Mitt. 1944. ⑬ Müller-Wille, W.: Zur Systematik u. Bezeichnung der Feldsysteme in Nordwestdeutschland. Z. f. E., 1941. ⑭ Hövermann, J.: Über Methoden und Probleme der Siedlungsgeographie. Die Erde. 88, 1957. ⑮ Hövermann, J.: Bauerntum und bäuerliche Siedlung in Äthiopien. Die Erde. 89, 1958. ⑯ Plewe, E.: Untersuchung über den Begriff der "vergleichenden" Erdkunde und seine Anwendung in der neueren Geographie. Zs. Ges. f. Erdk. Berlin. Erg. H. IV, 1932. ⑰ Maul, O.: Allgemeine vergleichende Länderkunde. Länderkd. Forschung, Festschrift für N. Krebs, Stuttgart 1936. (註) ⑱ Krebs ⑲ 比較地理学) ⑳ Krebs, N.: Vergleichende Länderkunde. 1951 Stuttgart. ㉑ Troll, C.: Die geographische Wissenschaft in Deutschland in den Jahren 1933 bis 1945. Erdkunde, I, 1947. ㉒ Vogel, W.: Stand und Aufgaben der historisch-geographischen Forschung in Deutschland. Peterm. Mitt. Hermann Wagners Gedächtnisschrift. Ergänzungsheft 209. 1930. ㉓ Gradmann, R.: Beziehungen zwischen Pflanzengeographie u.

Siedlungsgeschichte. G. Z. 12. 1903. ㊦ Hahn, H.: Sozialgruppen als Forschungsgegenstand der Geographie. Erdkunde. 11, 1957. ㊦ Schöller, P.: Aufgaben und Probleme der Stadtgeographie. Erdkunde 7, 1953. ㊦ Christaller, W.: Siedlungsgeographie und Kommunalwissenschaft. Peterm. Mitt. 84, 1938. ㊦ Fickeler, P.: Das Siegerland als Beispiel wirtschaftsgeschichtlicher und wirtschaftsgeographischer Harmonie. Erdkunde 8, 1954. ㊦ Schöller, P.: Die rheinisch-westfälische Grenze zwischen Ruhr. und Ebbe-Gebirge. 1952, Remagen. ㊦ Huttenlocher, F.: Die Ehemaligen Territorien des deutschen Reichs in ihrer Kulturlandschaftlichen Bedeutung. Erdkunde 11, 1957. ㊦ 拙稿「地域論」の機能主義的展開 地評一九五八 ㊦ Klöpffer, R.: Entstehung, Lage und Verteilung der Zentralen Siedlungen in Niedersachsen. 1952 Remagen. ㊦ Crämer, U.: Das Allgäu, Werden und Wesen eines Landschaftsbegriffs. 1954 Remagen. ㊦ Kötzschke, R.: Ländliche Siedlung und Agrarwesen in Sachsen. 1953 Remagen. ㊦ Pieken, H.: Zur Entwicklung der Siedlungsformen in den Marschen des Elb-Weser-Winkels. Die Erde 87, 1956.